熊本YMCAの使命

熊本YMCAは、熊本バンドの精神をうけつぎ、イエス・キリストによって示された愛と奉仕のわざに励み、青少年の精神・知性・身体の調和のとれた全人的成長を願い、すべての人々がひとつとなるための働きを行います。

①共に生きる社会 ②地球環境の保全 ③生涯学習の推進
④ウエルネス活動 ⑤ボランティア活動 ⑥平和な世界

KUMAMOTO
YMCA NEWS 2
THE YOUNG MEN'S CHRISTIAN ASSOCIATION

February 2010 vol.453

■ホームページ
www.kumamoto-ymca.or.jp
■ブログ
kumamoto-ymca.wablog.com
■メールマガジン登録
www.kumamoto-ymca.or.jp/cgi-bin/mail/mail.cgi

●発行所／(財)熊本YMCA／〒860-8739熊本市新町1-3-8 TEL096-353-6397㈹
●編集人／神保勝己 ●発行人／堤 弘雄 2010年2月1日発行(毎月2日発行)
1984年8月15日第3種郵便物認可 定価60円(送料60円)

尊い小さないのちを守り育てる社会の実現を

2007年5月、医療法人聖粒会慈恵病院に設置された新生児相談室〝こうのとりのゆりかご〟。熊本県内で起こった3件の乳幼児遺棄をきっかけに、同病院理事長の蓮田太二さんが「神様から授かった尊い命をなんとかして助けたい」と取り組みを始めた活動です。その設置は、私たちに改めて〝いのち〟の重さ、生き方について問いかけ、考える機会を与えてくれました。今回は、24時間体制で赤ちゃんの受け入れを行っている同病院看護部長の田尻由貴子さんに熊本YMCA学院成人を祝う会で講演いただいた内容をご紹介します。

やがて大人になる赤ちゃんのために

2004年、私は慈恵病院理事長たちとドイツを視察しました。以前のドイツでは、捨てられた赤ちゃんが死亡後に発見されることが多かったようです。しかし、視察時には、育てることができない親が赤ちゃんを預ける「ベビークラッペ」が国内70カ所に設置され、年間40人ほどの赤ちゃんの命が救われていました。

私が勤務する慈恵病院はフランシスコ修道会によって創設。胎児も〝神様から授かった大切な命〟だと考え、人工中絶を受け入れていません。そして、ドイツ視察後、身近に起こった3件の赤ちゃん遺棄をきっかけに、〝ゆりかご〟の設置に踏み切りました。設置については様々な解釈があるでしょう。しかし、命より尊いものはありません。マザーテレサは来日された時、「日本は、物は豊かですが心の貧しい国です。中絶天国ですね」と話されました。日本の出生数は年間、約110万人。一方、人工中絶数は届けられているだけでも30万人です。この数をどう考えますか?

〝ゆりかご〟には、赤ちゃんの命と同時に、赤ちゃんを棄てようとする親たちも救いたいという思いが込められています。本来の目的は、赤ちゃんを棄てる前、また人工中絶を選ぶ前に、職員に相談してもらうこと。望まない妊娠でも、育てることができなくても、大人の都合で尊い命を失ってはなりません。私たちがこれまでに受け入れた赤ちゃんは51人。親はみんな熊本県外の方で、全国から来られています。赤ちゃんは病院で育てることができないため、乳児院や施設などで、いつの日か親が名乗り出て迎えに来てくれる時を待つことになります。一方、事前に相談を受けると棄てる以外の選択肢を伝えることができます。例えば、特別養子縁組。赤ちゃんは新しい家族を得て、深い愛情を受けて育つことができるのです。

寄せられた相談の約半数は妊娠しているものの病院に行っていない、親に相談していない、今出産したなど、深刻なもの。レイプや不倫、未婚であること、パートナーの反対など、思いがけない妊娠をしたという相談も多く、命に対する思いのなさを感じます。学生の場合は、同居する母親が気づかなかったケースも。一番大切に思ってくれている親に、なぜ話すことができないのでしょうか。

近年の性意識の変化、性行為の低年齢化、人工妊娠中絶の増加などは、赤ちゃんの命に直結している問題です。出産適齢期の女性の性感染症は増加し、エイズは先進国の中で日本だけが増加しています。熊本県の2008年度の人口千人あたりの人工中絶率は、13・2人で、全国で最も高いのです。私たちは、一人で悩まず、相談してほしいと願っています。相談するうち、赤ちゃんを育てる決断をした女性もいるからです。特別養子縁組や一時的に乳児院に預けることを決めて出産した方もいます。これまでに1000件近くの相談を受け、130人の赤ちゃんの命を救い、母親たちのその後の生き方のお手伝いをすることができました。

私たちにできることは、赤ちゃんの幸せを祈り、母親が新しく前に進もうと決心できるようにと祈り、心のケアを行うことだけ。レイプによる妊娠後、相談の結果、出産して特別養子縁組を行った女性は、「子どもとは一度も会えませんでしたが、思わない日はないと思います。生んでよかった。育てていただく方に感謝します。そして、本当に愛する人との間に子どもを授かったら慈恵病院で出産したい」と手紙を寄せてくれました。

子どもはやがて大人になる存在です。子育て中の母親は子どもの心を育てる教育をしてほしいと思います。人は生物学的なヒトとして生まれ、人と人との間で育まれ、生活習慣を獲得して初めて、よりよく生きていける人間になることができます。そして、自分には存在価値があるという自尊感情を育むことで他者を愛することができるようになります。そのためには、赤ちゃんの頃から親とのスキンシップを通してたくさんの愛情を受け、健康な体と精神を養うことが必要です。性という字は〝心が生きる〟と書きます。人とふれあい、自分と他者の命を大切にする心を育てることが命＝性教育の原点です。子どもには輝いている大人の姿を見せましょう。妊娠中、子育て中の女性は孤立しないように地域、家庭で支えましょう。

「小さな命を守る社会、各自が責任を持って生きる社会、子どもがいきいきと育つ社会、家庭の絆を重んずる社会」が実現できれば、〝ゆりかご〟はなくなるはず。自分たちでできることから始め、ぜひみなさんの手で〝ゆりかご〟が必要のない世界をつくり上げてほしいと思います。

田尻由貴子さん
医療法人聖粒会
慈恵病院看護部長

1973年、助産師として聖母慈恵病院に勤務。菊水町健康管理センター、菊水町立病院勤務を経て、2000年9月より現職。2007年熊本県知事表彰、2008年日本介護協会会長表彰

わたしと聖句

マタイによる福音書第5章43節～45節

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

ルーテル学院中学・高等学校
チャプレン
崔 大凡

「雪が解けていくように」

1月中旬、熊本に雪がたくさん降った日がありました。熊本に来てまだ1年が経っていない私にとって、熊本で見る初雪。周りの人々は熊本にそんなにたくさんの雪が降ったのは4年ぶりだと言っていました。登校する子どもたちもみんな騒いでいました。しかし熊本より寒くて雪が多いところで生まれ育った私は何も驚くことがありません。むしろ雪が解ける早さに驚いたのです。4年ぶりの大雪で、確かに朝は周りを全部、白く覆っていた雪は、日差しが差し始めた昼頃にはほとんど解けてしまいました。満遍なく差し込む光は、いつの間にか、冷たい雪を解かしたのです。それを見ながら思いました。不完全でありながらいつも赦されている私たちも、その赦しの光を周りの人々に満遍なく放ったら、人々の間にある冷たいもの、心の中にある冷たいものも、いつの間にか解けてなくなるのではないだろうかと。そう祈り願います。